

資料

エコロジカルとジェネラリストの視点からみた 小学校生活科における指導法

岡正寛子*¹ 中川智之*¹ 橋本勇人*¹ 蓮井和也*¹

要 約

幼児教育と小学校教育の円滑な接続の必要性は認識されて久しいが、いまだ多くの課題がある。そのなかで、文部科学省では令和4年から「幼保小の架け橋プログラム」を推進した。これまで、身近な環境と生活を結びつけて学ぶ生活科は、幼保小の接続に大きな役割をはたしてきた。架け橋期においても同様であるといえるが、幼児期の教育の特徴を押さえ、子どもと環境との相互作用に着目する、エコロジカルな視点とジェネラリストの視点を持ち、学習課程を展開する必要がある。そこで、本論では、幼保小の架け橋期に焦点をあて、エコロジカルとジェネラリストの視点からみた小学校1年生の生活科における指導を行うための資料を作成した。そのなかで、①気づきを深める活動、②移行期としてのシステム拡大への支援、③幅広い視野で多角的に物事をとらえることができる経験を指導に取り入れることが重要であることが示唆された。

1. 緒言

幼児教育と小学校教育の円滑な接続の必要性は、認識されて久しい。平成20年にスタートカリキュラムが学習指導要領解説に示されて以降、生活科を中心に幼児教育と学校教育の接続が図られている。また、幼保小連携として、幼児と児童がともに参加する行事交流や小学校の授業体験などの取組みがなされてきた。しかし、幼保小連携の機会が短期的である、接続を見通した教育課程の編成・実施に至っていない、小学校での取組みが学校探検等にとどまっているなど多くの課題が指摘されている¹⁾。

そのなかで、文部科学省では、令和4年度から、全国的な架け橋期の教育の充実とともにモデル地域における実践を並行して集中的に取り組む「幼保小の架け橋プログラム」が推進されている²⁾。令和5年2月27日には、中央教育審議会初等中等教育分科会幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会により「学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について一幼保小の協働による架け橋期の教育の充実一」が取りまとめられた。

ここでいう「架け橋期」とは、「幼稚園施設の年長(5

歳児)の4月から小学校1年生の3月までの2年間」を指している。これは、上述したような課題を踏まえ、「幼児教育と小学校教育の教育課程の構成原理や指導方法等に様々な違いがあるため、幼保小の教職員が相互理解を図って円滑な接続を実現し、それぞれの教育を充実するためには、数か月程度の短い期間では不十分であり、長期にわたって取り組むことが必要」であり、「『架け橋期のカリキュラムの作成及び評価』(年度単位)の実効性の点」から設定されたものである²⁾。

さらに、前述の「学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について一幼保小の協働による架け橋期の教育の充実一」では、「架け橋期の教育の質保障のために必要な人材育成等」として「幼児教育と小学校教育の双方に精通する人材」が示されている²⁾。また、「遊びを通して学ぶという幼児教育の特性」を「社会や小学校等と共通認識を図っていくこと」が重要であることも指摘されている²⁾。今後の幼児教育及び小学校教育に関わる人材には、幼児教育と小学校教育の双方の教育について学修することが求められているといえよう。加えて、架け

*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 子ども医療福祉学科
(連絡先) 岡正寛子 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学
E-mail : h.okamasa@mw.kawasaki-m.ac.jp

橋期のカリキュラムについては、幼保小の教育に関わる人が共通の視点を持って、教育課程や指導計画等を共同して具体化していくことが必要となる。

架け橋期においても、身近な環境と生活を結びつけて学ぶ生活科の役割は大きい。小学校入学当初は、「生活科を中心としたスタートカリキュラムの編成・実施により、幼児期の生活に近い活動と児童期の学び方を織り交ぜながら、幼児期の豊かな学びと成長を踏まえて、子供が主体的に自己発揮できるような場面を意図的につくる」ことが求められている³⁾。幼児期の学びと成長を踏まえるためには、幼児教育の特徴を押さえ、子どもと環境との相互作用に着目する必要がある。子どもは、子どもを中心とした自らが直接接する環境だけではなく、子どもを取り巻く間接的な環境の影響も受けながら、生活し、成長している。また、子ども自身も自らを取り巻く環境に影響を与えている。さらに、子どもの生活は、分野ごとに分断されるものではなく、幅広い知識・技術習得しつつ、成長しているということを踏まえずなくてはならない。そのため、エコロジカルな視点とジェネラリストの視点を持つ必要がある。そして、教科間に関連を積極的に図るとともに、家庭や地域との連携を図ることで幼保小の接続期の教育の質を確保するための工夫をすることが求められる。

そこで、本論では、幼保小の架け橋期に焦点をあて、エコロジカルとジェネラリストの視点からみた小学校1年生の生活科における指導を行うための資料を作成する。

2. 方法

平成29年改訂小学校学習指導要領、平成30年改訂幼稚園教育要領、および、倉敷市採用の生活科教科書のうち小学校1年生で使用する教科書を研究対象とした。それらを用いて、①幼児教育と学校教育のねらい・目標、教育課程、方法についての関連性の整理、②生活科の目標、内容、学習課程の分析を行ったうえで、エコロジカルとジェネラリストの視点から指導法についての検討を行った。

3. 結果

3.1 幼児教育と小学校教育のねらい・目標、教育課程、方法についての関連性

幼児教育、学校教育のあり方については、社会の変化に自ら対応できる心豊かな人間の育成を目指し実施された、平成元年の改訂の影響が大きい。幼稚園教育要領では、環境を通して行う教育が基本とされ、遊びを通しての指導を中心とすることで、ねらいを総合的に達成するとされた。併せて、領域につ

いて、幼児期の子どもの発達の側面から、5領域（健康、人間関係、環境、言葉、表現）に再編成された（保育所保育指針も同旨の改定）²⁾。なお、この5領域については、筆者らが指摘したように、5領域を互いに分離・独立したものとして捉えるのではなく、さまざまな領域が絡み合って相互に影響を与え支え合いながら子ども発達が遂げられていく⁴⁾。一方、小学校学習指導要領では、幼児教育との関連も考慮して、低学年において直接体験を重視した学習活動を展開するために新教科として生活科が設定された。この内容を基盤として、現代まで教育要領の改訂がなされている。

そして、今般平成29年3月の「幼稚園教育要領」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」「保育所保育指針」の3要領・指針の改訂（定）において「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が新たに示された⁵⁻⁷⁾。また、「小学校学習指導要領」においても、総則や各教科で「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について記載され、学校段階間の接続を図るよう示されている⁸⁾。

以上の歴史的変遷を踏まえ、平成20年度の「幼児期の教育と小学校教育の接続について」⁹⁾で示された幼児教育と小学校教育の特徴の違いを基に、平成29年改訂小学校学習指導要領、平成30年改訂幼稚園教育要領に示される学校教育のねらい・目標、教育課程、方法に加筆修正し、比較した（表1）。

その結果、注目すべき点は、ねらい・目標の位置付けに違いがあることである。幼児教育では、決まった到達点に向かうのではなく、子ども一人ひとりが経験したこと、体験したことから幼児期の終わりまでに育ってほしい姿に示されたような力を獲得することになっている。幼児期の終わりまでに育ってほしい姿とは、①健康な心と体、②自立心、③協働性、④道徳性・規範意識の芽生え、⑤社会生活との関わり、⑥思考力の芽生え、⑦自然との関わり・生命尊重、⑧数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚、⑨言葉による伝え合い、⑩心豊かな感性と表現、という「10の姿」を示している。つまり、到達点の一つではないし、そのプロセスも一つではない。また、近年、着目される非認知能力の獲得も幼児教育の目指す到達点の一つとなっている。非認知能力は、認知能力と同様に人的要素の資本であり、教育経済学者であるヘックマンによって広まったが、幼児期から育成することが最も効果的であることが指摘されている¹⁰⁾。OECD（Organisation for Economic Cooperation and Development）では、非認知能力を「社会情動的スキル」と言い換えたうえで、「長期的な目標の達成」「他者との共同」「感情の管理」の

表1 幼児教育と小学校教育の特徴

<教育の特徴>

	幼児教育	小学校教育
教育のねらい・目標	方向目標 『～を味わう』、『～を感じる』などのように、 いわばその後の教育の方向付けを重視	到達目標 『～ができるようにする』といった具体的な 目標への到達を重視
教育課程	経験カリキュラム 幼児の生活や経験を重視	教科カリキュラム 学問体系の獲得を重視
教育の方法等	個人、友達、小集団 「遊び」を通じた総合的な指導 教師が環境を通じて幼児の活動を 方向づける	学級・学年 教科等の目標・内容に沿って選択 された教材によって教育が展開

文部科学省「幼児期の教育と小学校教育の接続について」を一部改変

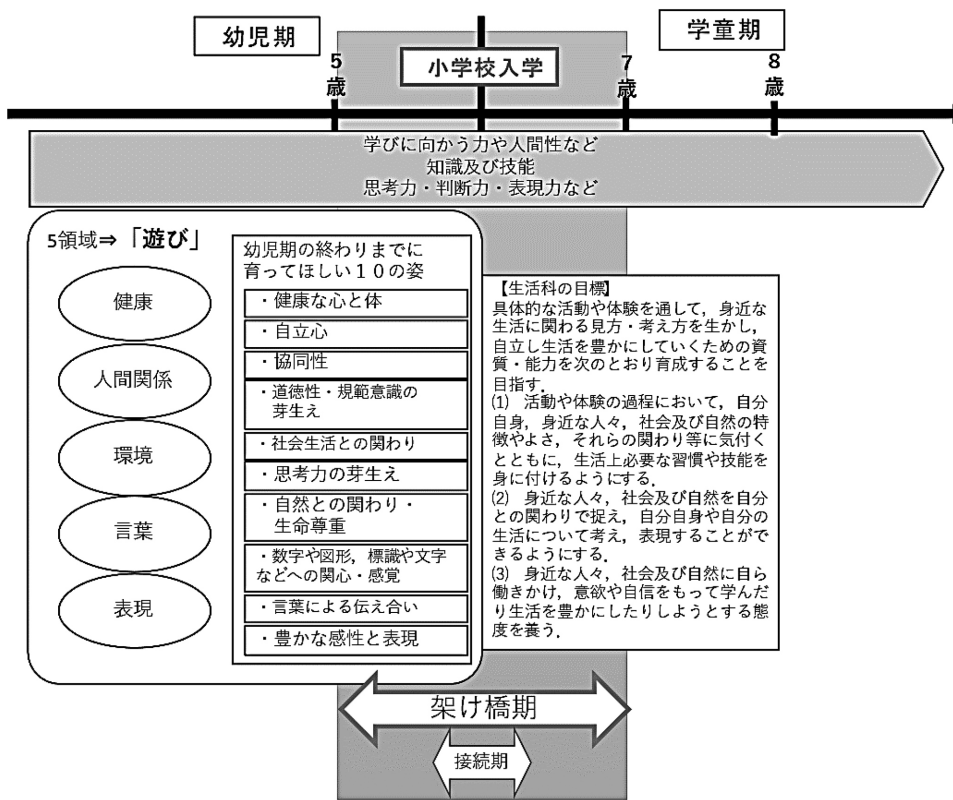


図1 架け橋期における幼児教育と学校教育の学びの連続性

3側面からなるものとしている¹¹⁾。また、遠藤は、非認知能力が認知能力と重なる部分があることを指摘し、「非認知能力なるもの」と表現した上で、「自己と社会性に関わる多様な心の性質」とであると定義づけている¹²⁾。つまり、非認知能力は、日本の幼児教育で重視されてきた「心情・意欲・態度」と重なるところがあり、幼児教育の資質・能力の一つであると言える。このように幼児教育では、多様な到達の方法がある。さらに言えば、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）は目指すべきゴールではないとされ、方向づけができればよい。幼児期に

おけるねらい・目標は、「方向目標」と位置づけることができる。一方で、小学校教育では、具体的到達点が表示されており、それに向かっていくプロセスは多様であるが、到達することが重視されている。そして、ねらい・目標の位置付けが違えば、教育課程や方法の違いともなる。特に、幼児教育での教育方法における、「遊び」や「環境」を通じてという点は学校教育にはみられない。このようなねらい・目標の関連性を図示したものが、図1である。小学校入学というわが国では誰もが経験するライフイベントの中で、教育の大きな

転換を迎えることになる。そのなかで、「具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質能力を次のとおり育成することを目指す⁹⁾。」ことを目標とする生活科は、幼児教育と小学校教育のギャップを小さなものにするために、重要な役割を果たすといえる。

3.2 生活科とエコロジカル・ジェネラリストの視点

平成29年改訂小学校学習指導要領にて、生活科の目標、内容は表2に示すように規定されている⁹⁾。ここでいう具体的な活動や体験とは、例えば、見る、聞く、触れる、作る、探す、育てる、遊ぶなどして対象に直接働きかける学習活動であり、また、そうした活動の楽しさやそこで気付いたことなどを言葉、絵、動作、劇化などの多様な方法によって表現する学習活動である³⁾。また、生活科の目標の(1)から(3)では、生活科で育成を目指す資質・能力が示されている。このなかで、「身近な人々」「社会

及び自然」という環境を通じて、気づき、考え、表現する。さらに、働きかけるというように、広がりを持った教育展開と資質・能力の獲得が目指されている。

教科書では、入学後、最初に取り組む単元は入学前と学校生活の相違を認識することとなっている¹³⁾。その際、視覚的にも生活の振り返りや連続性に気がつくことができるよう、下部に幼稚園や保育所でのイラストを配置し、上部に学校生活を配置している。その後も身近な生活として、学校生活を中心とした人との関わり、規範、生活スキルについて学ぶ内容となっている。このとき、通学路の安全に関わることとして地域生活に関係する単元がもうけられるなど、学校を通じた地域生活についても学ぶ機会が設定されている。これらを学ぶ時期はおおよそ1年生の7月頃とされており、接続期中期(小学校入学～)と後期(～小学校1年7月)までの間に設定されている。そして、その後「社会及び自然」へと広がり、植物を育てるなど到達目標を重視する小学

表2 学習指導要領に規定される生活科

教科目標	<p>具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。</p> <p>(1) 活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。</p> <p>(2) 身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにする。</p> <p>(3) 身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。</p>
各学年の目標及び内容(第1学年及び第2学年)	<p>1 目標</p> <p>(1) 学校、家庭及び地域の生活に関わることを通して、自分と身近な人々、社会及び自然との関わりについて考えることができ、それらのよさやすばらしさ、自分との関わりに気付き、地域に愛着をもち自然を大切にしたり、集団や社会の一員として安全で適切な行動をしたりするようにする。</p> <p>(2) 身近な人々、社会及び自然と触れ合ったり関わったりすることを通して、それらを工夫したり楽しんだりすることができ、活動のよさや大切さに気付き、自分たちの遊びや生活をよりよくするようにする。</p> <p>(3) 自分自身を見つめることを通して、自分の生活や成長、身近な人々の支えについて考えることができ、自分のよさや可能性に気付き、意欲と自信をもって生活するようにする。</p> <p>2 内容</p> <p>1の資質・能力を育成するため、次の内容を指導する。</p> <p>[学校、家庭及び地域の生活に関する内容]</p> <p>(1) 学校生活に関わる活動を通して、学校の施設の様子や学校生活を支えている人々や友達、通学路の様子やその安全を守っている人々などについて考えることができ、学校での生活は様々な人や施設と関わっていることが分かり、楽しく安心して遊びや生活をしたり、安全な登下校をしたりしようとする。</p> <p>(2) 家庭生活に関わる活動を通して、家庭における家族のことや自分でできることなどについて考えることができ、家庭での生活は互いに支え合っていることが分かり、自分の役割を積極的に果たしたり、規則正しく健康に気を付けて生活したりしようとする。</p> <p>(3) 地域に関わる活動を通して、地域の場所やそこで生活したり働いたりしている人々について考えることができ、自分たちの生活は様々な人や場所と関わっていることが分かり、それらに親しみや愛着をもち、適切に接したり安全に生活したりしようとする。</p> <p>[身近な人々、社会及び自然と関わる活動に関する内容]</p> <p>(4) 公共物や公共施設を利用する活動を通して、それらのよさを感じたり働きを捉えたりすることができ、身の回りにはみんなで使うものがあることやそれらを支えている人々がいることなどが分かるとともに、それらを大切に、安全に気を付けて正しく利用しようとする。</p> <p>(5) 身近な自然を観察したり、季節や地域の行事に関わったりするなどの活動を通して、それらの違いや特徴を見付けることができ、自然の様子や四季の変化、季節によって生活の様子が変わることに気付くとともに、それらを取り入れ自分の生活を楽しくしようとする。</p> <p>(6) 身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、遊びや遊びに使う物を工夫してつくることができ、その面白さや自然の不思議さに気付くとともに、みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとする。</p> <p>(7) 動物を飼ったり植物を育てたりする活動を通して、それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもって働きかけることができ、それらは生命をもっていることや成長していることに気付くとともに、生き物への親しみをもち、大切にしようとする。</p> <p>(8) 自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝え合う活動を通して、相手のことを想像したり伝えたいことや伝え方を選んだりすることができ、身近な人々と関わることのよさや楽しさが分かるとともに、進んで触れ合い交流しようとする。</p> <p>[自分自身の生活や成長に関する内容]</p> <p>(9) 自分自身の生活や成長を振り返る活動を通して、自分のことや支えてくれた人々について考えることができ、自分が大きくなったこと、自分でできるようになったこと、役割が増えたことなどが分かるとともに、これまでの生活や成長を支えてくれた人々に感謝の気持ちを持ち、これからの成長への願いをもって、意欲的に生活しようとする。</p>

校教育へと重点が移る。

以上のことから、生活科は子どもと環境との相互作用に着目した科目であるといえる。子ども（人）と環境との関係は、子どもと先生といった二者間のみで関係性が成立することもあれば、複数間で関係が形成されること、さらには子どもが直接かわらない（先生とボランティアの人など）関係性がある。そのため、生活科が取り扱う「身近な生活」は、学校生活、地域生活、家族生活という、子どもを中心としたエコロジカルシステムで捉えることができる。また、気づき、考えたことを表現し、働きかけるといった資質と能力を獲得することが目標となっている。これは、幅広い視点と知識をもち統合していくジェネラリストの視点であるといえる。

4. 考察

以上の結果を基に、生活科における指導には、エコロジカルとジェネラリストの視点が重要であることを指摘できる。

そこで改めて、「身近な生活」「身近な人」「社会及び自然」という観点から、エコロジカルな視点のなかでも、環境システムに着目し、エコロジカルシステムとして生活科を捉え、図示したものが図2である。

エコロジカルシステムは、Bronfenbrennerが人間発達の視点から生態学的環境を4つのシステムで表したものである¹⁴⁾。

4つのシステムは以下のように定義される。

①マイクロシステム（最も内側のシステム）

特有の物理的、実質的特徴をもっている具体的な行動場面において、発達しつつある人が経験する活動、役割、対人関係のパターンである。

（子どもと家庭、子どもと学校など直接関わる関係）

②メゾシステム

発達しつつある人が積極的に参加している2つ以上の行動場面間の相互関係からなる。つまり、マイクロシステムのシステムである。

（子どもにとっては、家庭と学校と近所の遊び仲間との間にある関係であり、大人にとっては、家族と職場と社会生活との間にある関係）

③エクソシステム

発達しつつある人を積極的な参加者として含めていないが、発達しつつある人を含む行動場面で生起する事に影響を及ぼしたり、あるいは影響されたりするような事柄が生ずるような一つまたはそれ以上の行動場面である。

（子どもの保護者の会社など、子ども自身が関わる

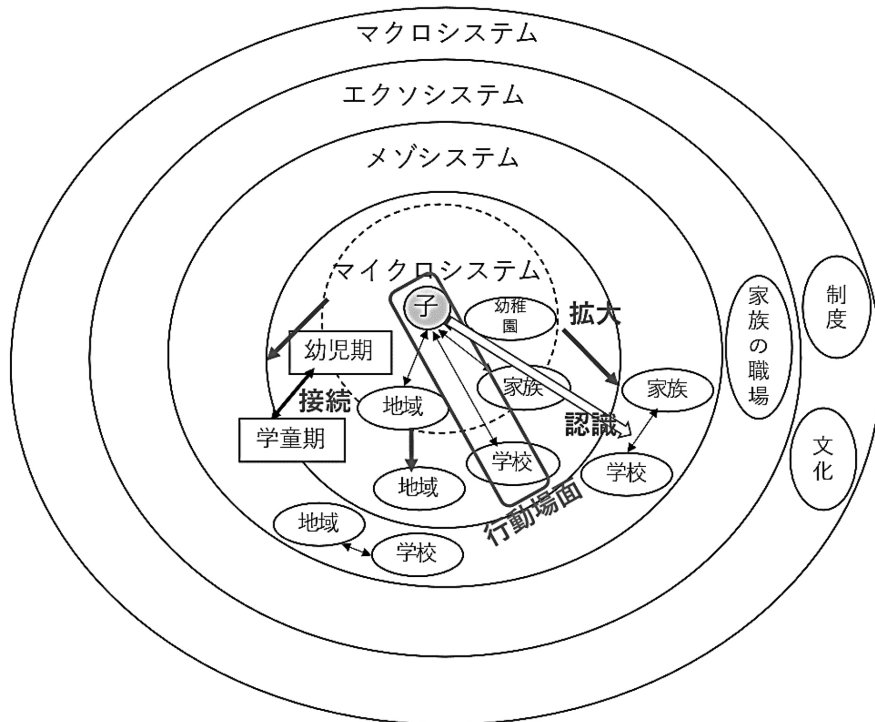


図2 架け橋期におけるエコロジカルシステムの変化と認識

ことはないが、生活に影響をあたえる関係)

④マクロシステム

下位文化や文化全体のレベルで存在している、あるいは存在しうるような、下位システム（マイクロ、メゾ、エクソ）の形態や内容における一貫性をいい、こうした一貫性の背景にある信念体系やイデオロギーに対応するものである。

生活科の対象となる「身近な生活」は、学校生活、家庭生活、地域生活である。これらは、子どもが直接関わることでできる行動場面になることが多く、マイクロシステムの中で展開される。また、「身近な人々」は、家族、友達、学校で働く人（担任・校長・養護教諭など）、地域で生活したり、働いていたりする人と、学習当初は子どもが直接関わることでできる範囲であり、マイクロシステムの中で学習する。しかし、いくつかの行動場面に登場する人々が同じであることに気づくことや、別々の行動場面の出来事の間に関係性に気づくことなどの経験を通して、自分以外の人の関係性といったメゾシステムの存在を認識し始め、その意味についても考えられるようになる。さらに、生活環境や人との関わりを通して、規範や倫理を学ぶことや、1年生の7月以降で取り入れられる自然や社会の営みを学習することで、エクソシステムやマクロシステムを認識することができる。

そのため、指導を行う際には、このシステム間の相互関係を理解した上で、子ども自身が経験できる行動場面を設定し、その中で役割や対人関係について気づく（認識する）ことができるように配慮する必要がある。生活科は、学年毎の目標や内容を設定するのではなく、2学年を通じた学習目標となっている。入学直後の学校生活の理解という内容とそれ以降に展開される学校教育の内容を断ち切ることなく、子どもと環境との相互作用でとらえることが必要不可欠である。そのためには、幅広い知識や経験のもと、広い視野を持ち、物事を多角的にとらえることができるような、ジェネラリストの視点での

教育活動の実践が必要である。

また、このエコロジカルシステムにおいて、見逃してはならないのが、生態学的移行という、生涯を通じて生ずる役割または行動場面の变化である。今回取り上げている架け橋期は、正にこの時期である。生態学的移行において、新しい行動場面に入る時にはいつでも、メゾシステムが形成され拡大される。例えば、幼稚園等の入学前の生活での関係性に、学校という新たな環境との関係性が生じる。又は、これまで行動していた地域よりも広い範囲の地域で行動をするといった変化である。このとき、子どもたちは認識ができず戸惑うことや、漠然とした不安をもつことが多くある。その点を加味し、新たな役割や行動場面に対する支援を学習という観点だけではなく、心身の発達という視点から支援する必要がある。

5. 結語

以上の結果および考察から、幼児教育と小学校教育の架け橋期において、生活科は重要な役割を果たしている。生活科の中においてはエコロジカルとジェネラリストの視点を踏まえる必要があり、①気づきを深める活動、②移行期としてのシステム拡大への支援、③幅広い視野で多角的に物事をとらえることができる経験を指導に取り入れることが重要である。

しかし、現在、各自治体において幼保小接続や生活科を担当する指導主事を配置する例は少なく、小学校の先生に対する研修も十分に行われていない。また、これまでのカリキュラムは接続期という短期間の間であり、十分な取組みとその評価が行われていなかった。そこで、架け橋期では、接続期前後を含めた取組み内容と評価方法について、幼児教育と小学校教育の双方の視点をもって設定しなければならないと考える。また、生活科を担当するに当たっては幼児教育の特徴に精通する人材育成を行っていかなくてはならない。これらは今後の課題であるといえる。

謝 辞

本研究は JSPS 科研費19K14193の助成を受けたものです。

文 献

- 1) 文部科学省：令和3年度幼児教育実態調査。
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/20230308-mxt_kouhou02-1.pdf, [2023].
(2023.3.16確認)
- 2) 文部科学省：学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について—幼保小の協働による架け橋期の教育の充実—。

- https://www.mext.go.jp/content/20220307-mxt_youji-1258019_03.pdf, [2023]. (2023.3.13確認)
- 3) 文部科学省：小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 生活編. 平成29年7月. 初版, 東洋館出版社, 東京, 2018.
 - 4) 中川智之：幼児期における保育の内容（5領域）. 初版, 橋本勇人編代, 幼稚園教諭・保育教諭を目指す人のための教育学入門, 初版, 大学教育出版, 2020.
 - 5) 文部科学省：幼稚園教育要領<平成29年告示>. 初版, フレーベル館, 東京, 2017.
 - 6) 内閣府・文部科学省・厚生労働省：幼保連携型認定こども園教育・保育要領<平成29年告示>. 初版, フレーベル館, 東京, 2017.
 - 7) 厚生労働省：保育所保育指針 <平成29年告示>. 初版, フレーベル館, 東京, 2017.
 - 8) 文部科学省：小学校学習指導要領. 初版, 東洋館出版社, 東京, 2018.
 - 9) 文部科学省：幼児期の教育と小学校教育の接続について.
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/070/gijigaiyou/__icsFiles/afieldfile/2010/06/11/1293215_3.pdf, [2010] (2023.3.16確認)
 - 10) ジェームズ・J・ヘックマン：幼児教育の経済学. 東京経済新報社, 東京, 2015.
 - 11) OECD：社会情動的スキル—学びに向かう力. 初版, 明石書店, 東京, 2018.
 - 12) 遠藤利彦：「非認知」の中核なる感情. 発達, 163, 2-8, 2020.
 - 13) 養老孟司, 藤井智恵子監修：せいかつ上 みんななかよし. 教育出版, 東京, 2021.
 - 14) ユーリ・ブロンフェン布伦ナー：人間発達の生態学. 川島書店, 東京, 2007.

(2023年6月5日受理)

Teaching Methods in Elementary School Life Studies from Ecological and Generalist Perspectives

Hiroko OKAMASA, Tomoyuki NAKAGAWA, Hayato HASHIMOTO and Kazuya HASUI

(Accepted Jun. 5, 2023)

Key words : ecological system, generalist, bridging phase,
cooperation between primary and secondary schools at an early age, life sciences

Abstract

The need for a smooth connection between early childhood education and elementary school education has long been recognized, but there are still many issues to be addressed. In response, the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) has promoted the “Bridge Program for Preschool and Elementary School Education” since 2022. The Life Studies program, which has been studying the relationship between the immediate environment and daily life, has played a major role in connecting elementary schools with preschools. The same can be said for the bridging period, but it is necessary to develop a curriculum with an ecological and generalist perspective that focuses on the interaction between the child and the environment, while keeping in mind the characteristics of early childhood education. In this paper, we focus on the bridge period between preschool and elementary school, and we have analysis materials for teaching life science in the first grade of elementary school from the ecological and generalist perspectives. The results suggest that (1) activities to deepen awareness, (2) support for system expansion as a transitional period, and (3) incorporating experiences that enable students to view things from a wide range of perspectives and from multiple perspectives into instruction are important.

Correspondence to : Hiroko OKAMASA

Department of Medical Welfare for Children

Faculty of Health and Welfare

Kawasaki University of Medical Welfare

288 Matsushima, Kurashiki, 701-0193, Japan

E-mail : h.okamasa@mw.kawasaki-m.ac.jp

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.33, No.1, 2023 101 – 108)